



ヒグマは日本最大の陸生動物

支笏洞爺国立公園のすがた

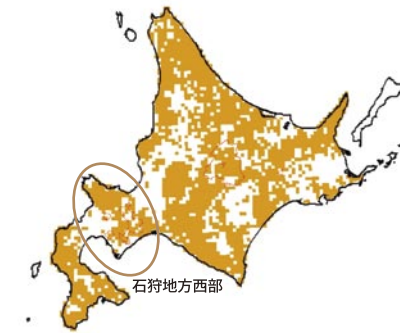
野生動物との共存

野生動物の重要なすみか



冬毛をまとったキツネ

北海道のヒグマの分布 (2000~2002年)



出典：環境省哺乳類分布調査

- 1 エゾフクロウ
- 2 キビタキ
- 3 クマガエラ
- 4 イカル
- 5 アカハラ



森にすむ鳥たち

自然林の広がる支笏湖周辺には森林性の鳥類が多く、新緑が鮮やかな初夏にはさわやかなさえずりが森に響く。冬の気候が厳しい北海道の森では、多くが夏鳥である。留鳥はアカゲラやクマガエラなどのキツツキ類、シジュウカラやハシブトガラなどのカラ類、エゾライチョウが主なものだ。夏鳥はクロツグミ、アカハラ、キビタキ、ウグイス、アオジ、ツツドリなど、種類が多い。

国立公園は、生物の多様性をまもる場所として、大切な役割を担っている。豊かな森林に覆われたこの公園には、ヒグマをはじめ、エゾシカ、キツネ、ユキウサギ、エゾリス、エゾモモンガ、それにコウモリやネズミの仲間など、数多くの哺乳類が生息する。これらの中で、特にヒグマとエゾシカは、人との関係を考える上で重要な動物である。

ヒグマは日本最大の陸生動物であり、日本では北海道だけに生息している。かつては北海道全域に広く分布していたが、平野部の開発などにより生息地の縮小と分断が進んだ。特にこの公園を中心に生息する石狩地方西部のヒグマは、絶滅のおそれがあるとされている。

また、エゾシカは近年個体数が増加し、農林業の被害や交通事故などの問題が起り、国立公園でも植生に影響を与えるようになった。そのため、北海道はエゾシカの保護管理計画を定め、科学的知見に基づいた管理を進めている。

外来生物による影響

ペットや食用などの目的で輸入された外国産の動物が、逃げ出したり捨てられて野生化する例は多い。支笏洞爺国立公園周辺では、アメリカ北西部原産のアライグマが生息範囲を広げており、農作物被害や生態系への影響が問題になっている。また、在来種のニホンザリガニに被害を及ぼす恐れのあるアメリカ原産のウチダザリガニは、最近洞爺湖と支笏湖でも生息が確認された。ともに平成17年(2005)に制定された外来生物法によって移動や野外に放すことが禁止された。現在、野生化した個体の捕獲などの取組みが進められている。



エゾモモンガ



捕獲されたアライグマ

Column

洞爺湖中島のエゾシカ



洞爺湖の中央にある中島では、昭和32年(1957)に持ち込まれた3頭のエゾシカが繁殖し、食害による森林の荒廃が進んだ。いま、中島の植生は、シカが食べない植物が優占している。シカは一時は300頭近くまで増え、餌不足による大量死も発生した。現在はほぼ150~200頭で推移しており、生態系のバランスを考える上で貴重な事例となっている。

中島は、周囲約10キロの隔離された島で、エゾシカの個体数や植生の変化などが把握しやすい。この環境を活かして、シカの密度と植生の変化や、シカが生きるのに必要な植物の量など、シカの保護管理のための基礎となる研究が進められている。